

新島襄・八重と同志社大学

奨励	小笠原 浩一【おがさわら・こういち】
奨励者紹介	宣教落語家 関西キリスト災害ネットワーク副代表・クリスチャン防災士ネットワーク世話人 ハンガーゼロ（日本国際飢餓対策機構）親善大使

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」（ヨハネによる福音書 3章16節）と書いてあるではないか。誠に主イエスこそ、救い主です。—新島襄談—

皆さん、こんにちは、私、宣教落語家のゴスペル亭パウロこと小笠原浩一と申します。

今回、この同志社大学で「新島襄・八重と同志社大学」という落語を演じるのは、長い同志社大学の歴史の中で、おそらく初めてではないでしょうか。

本日は、この同志社大学の建学の精神とキリスト教に触れるという事を、この偉人伝落語を通して感じて頂ければ幸いです。

新島七五三太生まれる

時は、天保14年1月14日、上州安井藩板倉家江戸藩邸の広いお屋敷では、大きな喜びにつつまれていたのでございます。

- 「ああ、とみさん、よ一頑張った。男の子の元気な赤ちゃんよ。」
- ◆「えっ男の子？」
- △「なんとおめでたいことでしょう。」
- 「ああ、初めての男のお子様です。早く、ご主人様の弁治様へお伝えして！」

板倉家に仕える、新島民治に、初めて男の子が誕生したのである。

- 「我が孫の上の四人の仔らは皆女じゃ、さあて、次もおなごじゃろ。まあ、寝ておこう。」
- ◆「ご主人様、ご主人様。弁治様！」
- 「なんじゃ、大きな声で。」
- ◆「今度は、お坊ちゃまですよ。」
- 「なんじゃと、それは、しめた！」

と、いう事で、その子の名前は、新島七五三太と名付けられました。

この子が後の、新島襄でございます。

七五三太幼小時代

時は移り、七五三太が10歳の時、アメリカのペリー提督が来航しました。

- ◎「ああ、僕は、歴史で勉強したような、強い人、偉い人になりたい。そのためには、剣道の修行をするよりも、もっといろんな事を、学びたいんや。」

ペリー来航に刺激され、勉強したいと思い、七五三太は剣道の修行を辞めてしまったのです。

- ◇「おい七五三太よ、剣道の修行辞めたらしいな、そんなこと許されんぞ。」
- 「そうやで、武士の子どもが学問するなど、生意気だぞ。」
- ◎「いいや、僕は、学問に励む。」

七五三太の、学問好きには、板倉のお殿様も反対していたのである。

- ☆「七五三太よ。」
- ◎「はっ、お殿様。何か。」
- ☆「お主、さては、また、オランダ語の教師の所へ行こうとしていたな。」
- ◎「はい、私も、もう16歳でございます。外国の知識をもっと学びたいのでございます。これからは、外国人に聞くのが得策やないかと思ひまして。」
- ☆「七五三太、まだ、わからぬか！」
- ◎「はい、お殿様、申し訳ございません。しかし私は、ただ、学問がしたいだけなのでございます。」
- ☆「では、お主の給料をもう少しあげてやる。そうしたら、行かなくなるかな。それでも、行くというのなら罰を与えるぞ。」
- ◎「お殿様、私は、これ以上のお金はいりません、もっと勉強したいんです。」

七五三太は、何度も鞭でうたれ棒でなぐられました。

聖書に出会う

ある日の事でございます。七五三太は、友人の家で、小さな聖書に出会うのです。

「初めに、神は天地を創造された。」（創世記 1章1節）

◎「なに、神というお方がこの天と地をつくられた？なんや、神様は、お百度参りや苦しい修行をしたら、病気を治したり、家内安全を守ってくれるんと違うんか？そうか、わかったぞ。神様、この天と地をおつくり下さったことを感謝いたします。今まで、知らなかったとはいえ、お礼も申し上げなかった事を、お許しください。」

## 国禁を犯して脱国

本当の神様を知った、七五三太は友人から、こう言われました。

△「函館に行けば、イギリス人がアメリカ人に会えるよ。そうすれば、君の願う聖書を教えてくださる教師が宣教師に会えるかもしれないね。」

しかし、反対しているお殿様からのお許しは出ずにいました。そこで、七五三太は、殿さまよりも偉い藩主に出会い、函館行の許可を願い出たところ、ついにその許可が下りたのでございます。そして、江戸から快風丸に乗って開港地の函館に。

そして、6月14日、真夜中、一人の友人が武士の格好をし、七五三太は、その家来のようないでたちになり、無事、ベルリン号に乗ることが出来たのです。七五三太21歳。

その後、ベルリン号から上海でワイルド・ローヴァー号に乗り換えることとなりますが、その船長が七五三太をジョーと呼ぶようになったのです。

そして、襄は香港で中国語訳の聖書を見つけました。

◎「これなら、英語の聖書よりも、はるかに読みやすい。しかし、持ち合わせが無い。どうしたものか？ そうだ、刀を売ることにしよう。武士にとって刀は命。しかし、神の御言葉を読んでみたい。」

襄は、聖書を手にしました。

マタイから、マルコ、ルカ、ヨハネまで読んだとき、

◎「うわあ、『神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。』（ヨハネによる福音書 3章16節）と書いてあるではないか。誠に主イエスこそ、救い主です。」

船はボストンに着きました。

襄が乗ってきたワイルド・ローヴァー号の船主、ハーディー夫妻の支援を受け、襄は大学に入学することが出来ました。しかし、襄は、密出国してきた身、このまま日本に帰れば死刑となります。

そんな時、森 有礼という駐米外交官とボストンで出会いました。

その森外交官が日本政府と掛け合い、パスポートと留学免許状を発行させたのです。

さらに、日本から来た第二次使節団、いわゆる、岩倉使節団と出会うことになりました。

このとき、岩倉 真 視・大久保 利通・末吉 孝 允・伊藤博文らがいました。

△「うーん、これからの日本には、教育が必要だが、言葉がわからん、森君、誰かいないのかね。」

▼「はいはい、います。いますよ。打って付けの方が。新島襄と言います。」

△「新島襄君か、君、早速連絡してくれ。」

▼「はっ。」

△「あなたが新島君か。私たち使節団は、この国の学校を見て回りたい。そこで、あなたに通訳を頼みたいんだが、引き受けて下さいますか？」

◎「はい、よろこんで引き受けさせていただきます。」

襄は一年間、使節団とともに、アメリカ・ヨーロッパの国々を回りました。そして、これが日本の教育制度の基礎となったのでございます。

## 10年ぶりの帰国

新島襄は、明治7年11月26日に横浜に着きました。実に10年ぶりの帰国です。

◎「只今、お父さん、お母さん、七五三太が、帰りました。」

○「七五三太！ あんた、よう帰ってきた。あなた、あなた、七五三太よ。帰って来た。」

◇「七五三太！ 七五三太やないか、ようお帰り、よう、帰った。ご苦労だったね。」

○「なあ、七五三太、アメリカのお話しをして、どんな風に暮らしてたん？」

◎「ハーディーさんに大変お世話になりました。 涙」

それから、襄は藩校やお寺を借りてイエス様のお話しをしました。困ったのは県知事。

◆「襄を逮捕すれば済むことだが、すでにその名前は全国区。そうや、政府の意向を聞こう。」

知事は、東京に出掛けました。その時の返事は「えっ、新島襄なら宜しいですと。」

◎「ここが、大阪府庁か。初めまして新島と申します。」

・「はい、学校建設ですか。それは、良いことだが、宣教師が教えるのは困ります。」

◎「大阪はダメか。では、京都に。なんせ、今、京都では博覧会が開かれているから、この期間中は外国人が自由に入出入りできている。神様、この道を開いて下さい。」

## 同志社英学校設立

・「新島さん、よく私、山本覚馬の所に来られた。学校建設ですか、おやりなさい。

私も精一杯協力しますよ。まず、京都府知事に声をかけましょう。」

◎「ありがとうございます。この京都にキリスト教の大学が必要なんです。」

早速、横村京都府知事に働きかけ、御所の近くに旧薩摩屋敷の5800坪の広大な土地を安価な値段で購入する事が出来たのです。

◎「そう、この大学の名前は同志社英学校にしよう。一つの目的のもとに努力する人たちの集まる所にしたいんや。」

新島・山本、二人による同志社の基礎がつくられていったのです。

1875年・明治8年11月29日 同志社英学校はスタートしました。

時間は朝の8時、新島襄の家で生徒は8名。

新島襄は、山本覚馬の妹、八重と知り合い、そして、二人の気持ちは愛情へととなり、八重はクリスチャンとなりました。明治9年1月3日、二人は結婚したのでございます。この八重が同志社女学校の教師となり、夫を支えていくようになりました。

時はうつり、明治13年2月、新島は愛媛地方に伝道旅行に出掛けました。

その旅行中の事。

- ×「面白くない。不公平やないか。」
- △「そうや、何でやねん。4月に入学したもんも、9月に入学したもんも何で同学年や。」
- ◆「君たちの言いたいことはよくわかる。たしかに、そうかもしれんが、ここは事を荒立たせずに穏便にな、穏便に。」
- ◇「ほんまやで、話せばわかる、な、ここは先生の顔を立てて取めてくれな。」

新島校長の留守を預かる先生方は、問題の解決を図らないで、生徒たちだけを静かにさせようとしたのです。その結果・・・

- ◇「こんなん、あかんわ、もう授業に出るん、止めや、やめ。」
- ◆「ほんま、無断欠席しよ。」
- ◇「そやそや。」

この連絡は、愛媛に居る襄のもとに入りました。

- ◎「なに、生徒が授業に出ない？私は愛媛から京都に戻りますよ。」
- ◎「君たち、これはどういう事だ。」
- ◇「校長先生、いけないことは分かっています。しかし、もう、後戻りできません。」
- ✱「僕たち上級生が説得いたします。」
- 「私たち、一年生も。」

襄は、八重とともに祈り続けました。

◎「ああ、神よ。私は、教育者としてふさわしくありません。この罪をおゆるし下さい。神よ、彼らに優しい心を与えて下さい。この状態が人間にとって納得のいく状態であっても、神の前にどんなに恐ろしい罪であるか、愛の神であるあなたを悲しませることであるかを教えて下さい。神よ、助けて下さい。」

しかし、良い方向には何一つ向かいませんでした。そして職員会議で

- ◎「先生方、私は、同志社英学校のため何をしなければならなかったかわかりました。私は、本日限りで校長を辞任いたします。」
- ・「えっ、辞任って。」
- ・「今回の事は、私たち教師が収拾できなかった事と、生徒に問題があります。」
- ・「そうです、先生、辞めないでください。先生が辞めたら、この同志社英学校は、本日限りです。」
- ・「私たちが、わるかったんです。」
- ◇「お前ら、校長先生が辞任されるって聞いたか？」
- ◆「こんなに大騒ぎになるとは思ってもいなかった。」
- ◇「自分らがやったことがわかったんや。そうやろみんな。」
- ◆「そうや、校長先生にあやまる。」
- ◆「校長先生、すみませんでした。辞めんとして下さい。」
- ◇「ぼくら、今から授業にでます。」

学生たちは教室に戻りました。これで全て解決したと、ほとんどの者は考えていました。

## 自責の杖

明治13年4月13日、襄は全校生徒、教職員、校内にいる全ての者を集めました。

朝礼拝がはじまります。しかし、いつもと明らかに雰囲気は違っていました。

- ◎「この度、神様が建て上げようとしている同志社で起こった事件は本当に残念な事です。事件そのものは、一応の解決をしましたが、それで終わったものではありません。私は、考えました。このままで終えてはならない。将来の同志社英学校の為にも、このままではいけないと考えました。私は、校長としてどうすべきか神に祈りました。そして、ひとつのことがわかったのです。罪は罰せられなくてはならないという事を。」
- ◇「どういことや、誰が罰せられるんや。」
- ◆「俺たちや。」
- ・「いや、私たち教師や。」
- ◎「この学校の責任者は私、新島襄です。全ての責任は私にあります。」
- ◆「校長が責任者なら、罰するって、どういうこっちゃ。」

◎「罪は、必ず罰されなければなりません。」

こう言って、上着を脱ぎ、机の上に置きました。そして、ワイシャツの左の袖をまくり上げました。いつのまにか、裏の右手にはステッキのような1mほどの杖が握られていました。

「ピシッ」「ピシッ」、三度、四度。

・「先生の手から血が噴き出した。」

◆「真っ白なワイシャツが真っ赤になっているぞ。早く止めよう。」

裏の手は腫れあがり、杖は二つに折れ、やがて、三つに折れ、破片が飛び散ります。

◆「校長先生、本当に自分たちがわかったんです。」

◇「もう、ぶたないでください。校長先生。」

生徒たちは、裏の腕にすがり、泣きながらやめて下さいとお願いしたのでございます。裏の周りには、沢山の学生と教職員が、心を込めて真の悔い改めへと導かれたのでございます。

校長先生……………もう、皆 涙

この折れた自責の杖は同志社大学で保管され、今は、新島遺品庫で保管されています。

これが、まさしく神様のお導きでした。一同は、もう一度、同志社の基礎を知ったのであります。

### グッドバイ、また会わん

1890年明治23年1月20日の早朝、同志社英学校に一通の電報が届きました。

新島襄「危篤」。金森校長は、神奈川県大磯へと出発しました。

同志社の学生たちは「神様、どうか校長先生をお救いください。」と、泣きながら祈る姿が休むことなく持たれたのです。

◎「絵具を持って来なさい。そう、伝道計画を進めなくてはならない所はここです。」

◎「八重は、八重はいるか。」

♡「はい、ここにいますよ。」

◎「今日まで、おおきにな。でも、苦勞のかけっぱなしやったなあ。感謝しているよ。

私の方が先に逝くが、後は宜しく頼んだよ。

そう、狼狽するなかれ、グッドバイ、また会わん。」

1890年1月23日午後2時20分、新島襄享年47歳は八重の腕の中で静かに天に凱旋しました。

2022年6月8日 同志社スピリット・ウィーク春学期  
京田辺水曜ランチタイム・チャペル・アワー「奨励」記録